

# エイズと社会

(1994 年度始業講演——文理学部)

広 瀬 弘 忠

「犬もあるけば棒に当たる」は、伊呂波ガルトの中でも独特のアフォリズムの味わいがある。もともとの意味は、何かことを行なう人間は、時に禍いに出あう、という意味であったようだ。それがどういうわけか、辛抱して何かをしていれば思わぬ幸運にめぐりあうという、全く逆の意味を持ってしまった。

ところで、もし犬が歩くのではなく、走ったとしたらどうであろうか。そしてひたすら走り続けたら。思わぬ幸運にめぐりあうチャンスは、より多くなると同時に、禍いに出あう危険も増えるだろう。禍と幸運の“棒”は、あちらこちらにあるのだろうが、当たってやっとそれと気付くほど、この犬の知覚能力は低いのだ。

実はこの犬とは我々のことだ。我々が歩く速度を上げ、走り、疾走するようになった現代、我々はさまざまな棒に出あう可能性と危険性をもっている。我々は未知との遭遇の機会を十分に持つようになったのだ。棒とは善悪、利害を別にして、未知なるものということである。

我々はエイズという未知と遭遇してしまった。そしてエイズの流行に苦しんでいる。我々は、エイズに打ち倒された。だが、再び起き上がることができだろう。

エイズだけではない。大小の未知なるリスクが繰り返し我々の眼前に現れてくるだろう。どのように備えていくべきか。しかし、前方だけ注意していればよいというわけではない。疾走していく我々のそばで、かつて我々を苦しめたものたちが新しい装いのもとに現れてくる。我々は旧知とも邂逅するのだ。

たとえば、マラリアは、アフリカやインドなどを中心に、世界中で毎年200万人の死者を出している。この病気はエイズに比べても格段に多くの犠牲者を出す殺し屋である。もし地球温暖化が進んで、現在の温帯地方がさらに暖かくなり、マラリアの媒介をする蚊の生息に適するようになれば、マラリアは世界中でさらに猛威をふるうようになると予測する科学者がいる。

我々が生きていくということは、我々が変化していくということである。変化のスピードが速まれば、新しい病気との出会いの頻度も高くなる。

エイズの時代に入るまで、ペニシリンから始まる抗生物質の革新的開発の中で、医学は感染症を克服したと信じられてきた。このような凱歌の中で、大学や総合病院の感染症科には閑古鳥が鳴き、これからはガンや心臓病や糖尿病などのいわゆる慢性的成人病治療の時代だという大合唱が起こったのであった。「だが、このような勝利の宣言は早すぎたのです」とイェール大学の疫学教授、ロバート・ショップは述べている。「感染症の危険は過ぎ去ったところか、ますますひどくなっています」と、彼は言う。

さて、ここでエイズの流行の歴史に少し触れよう。もし、最初のエイズ患者が、ニューヨークやパリ、ロンドンのような世界の中心に位置する大都会の男性同性愛者たちでなかったら、少なくとも流行初期の段階では、エイズに対する世の中の関心はそれほど高くはなかったであろう。日本の新聞に最初のエイズ報道が現われた頃、1981年7月5日の朝日新聞は、「ホモ愛好者に凶報」、毎日新聞は、「ホモだけが、かかるがん——米で発見」という見出しで、それぞれ紹介記事を掲載している。

男性同性愛者の間で、欧米における最初のエイズ患者が発見されたというのは、単なる偶然ではない。アメリカで最初のエイズ患者が発見された1981年当時には、その他の感染ルートからの患者もいた。だがそれは目立たなかったのである。流行病は、特定の小さな集団の中で多くの患者を発生させることで、はじめてそれと認知される。

エイズが男性同性愛者と結びつけられたことはエイズのイメージを決定的

なものにした。エイズフォビア（エイズ恐怖症）はホモフォビアによって倍化した。だが、最初の犠牲者に男性同性愛者が多かったという現実、エイズに別の側面をもたらしたのである。

欧米の大都市に住む男性同性愛者は、一般に教育程度が高く、高収入で、専門的職業に就いている者や芸術家、研究者など、社会的影響力をもつ層が多く含まれている。しかも彼らは社会的な迫害と差別を受けているために、お互いの団結心が強い。その能力、財力と社会的な被差別の故に、彼らはしばしばユダヤ人と比較されることが多い。

身近にエイズの犠牲者を出し、あるいは患者を介護し、あるいは自分自身がエイズウイルス (HIV) に感染している男性同性愛者の集団が、エイズ患者のサポートシステムの雛型をつくり、自治体や政府に要求してエイズ診療体制と財政的支援を確保し、治療法開発のための研究費を集め、新薬の臨床試験のための民間ベースの組織をつくり、医療情報を感染者に流し、エイズに対する差別と偏見に抗議して「声」をあげたのである。彼らを抜きにして、今日の世界のエイズ対策を語ることは出来ない。彼らの存在はきわめて大きな意味をもっていたのである。

エイズの流行は、中世のペストや近世のコレラの流行が当時の社会にもたらしたのと同じような影響を、現代社会に及ぼしつつある。我々の生存の過程で生れてくる未知なるリスクは既知なるものとなり、過去に既知であったものは、再び未知なるものとして我々に脅威を与える。すなわち、過去は再生し、未来は変化する。我々はさまざまなリスクのすべてを避けて通ることはできない。肝心なことは、我々が出合うリスクがどのような性質のものか、よく目をこらして見ることである。我々がなすべきことは、未来を畏怖し、過去を洞察しながら人間を尊重し、科学を信頼して、我々が打ち当たったリスクによってもたらされる犠牲を、最小限にいとめることである。そして、犠牲者への哀悼の念を忘れてはならない。

ペストが大流行した中世ヨーロッパで、人々は、“メメント・モリ (me-

mento mori)”という言葉に心に刻んだ。これは、「汝死す身なるを忘るなかれ」という意味と、「汝死せし者を忘るなかれ」という両方の意味を持っていた。

エイズを含めたアンノウン・リスクの時代に生きる我々にも、“メメント・モリ”はふさわしい響きをもっているように思われる。